

男か女か？

有坂 広一

小倉が三時休みに、椅子に座っていたらアルバイトの女から話しかけられた。

「あんたのことを、大谷さんが言っていたよ。小倉さんって、得体が知れないとね。髪が長くて女みたいだし」

「得体が知れないだって。そんな言い方は許さんぞ」

「私が言ったんじゃないわ」

「頭に来るな。あの婆ア、いつかやつつけてやるからな」

小倉はカツとなった。それでなくともストレスが溜まっている。大学の入試に二年続けて失敗し、仕方なく就職した。社会生活の第一歩をこんな居心地の悪い印刷会社から始めるとは考えてもみなかった。

「わざわざ言いに来たのか」

「あんたがここにいたから話しただけよ」

「お前は分別がないぞ」

「文句があつたら大谷さんに言いな」

「ああ、ギャンギャン言つてやるよ」

「好きなようにしな」

女は向こうへ行つてしまった。しかし大谷菊江の話したことは社員達の見方を代表しているのかもしれない。何となく周囲の排他的な目つきを感じるからだ。総務課の大谷菊江は四十代で機知に富んでいるとか、知性があるとか、女手一つで一人娘を育てているとか、はなはだ評判がいい。小倉も一応敬意を払っているものの自分とは別の世界の人くらいにしか見ていない。それはさておいて、彼の菊江への態度は急変して、自分から挨拶をするとか、話しかけるとかはしなくなつた。むろん、それくらいのことでは腹の虫が収まるわけではなく、機会があれば報復してやりたかつた。が、なかなかチャンスがない。それだけにますます孤立感が募つた。

あれから十日が過ぎた。友達からもらった招待券で『デザイン・2018年展』を見て来た。その帰り、都心の公園のベンチに座つて休んだ。十数メートル先には、噴水が寒々とした水しぶきを上げていて、春先

というのに今にも雨か雪でも降りそうな曇空である。その時、足音がして、彼と同じベンチに人が座った。反対側に自転車を立てかけてあるのを今初めて気がついた。ジョギングでもしてきたのだろう、休みの日の公園はその種の人達が目につく。座った時小倉は何気なく横顔を見た。

それから妙なことにこだわり出した。端に座っている人は若いのだが、男なのか女なのか容易に識別できないのだ。正面から見る機会はなかったが、目の端でとらえた限りでは男女どちらとも取れる。眉は濃く、切れ長の目をしていて服装は水色のスキーウェアにジーンズ姿。残念ながら胸のふくらみは見えない。一体どっちなのだろう。けれども、こうして座っているだけでは確かめる手立てはない。少し間をおいてから彼は思い切って声をかけた。

「あ、失礼ですが：」

「何でしょうか」

振り向いた。これで分った。声もそうだが、赤みの差した色白の頬は紛うことなき女性だった。それから慌てて質問した。

「ここへは、よく来るのですか」

「ええ。体を鍛えにね」

「何か運動をしているの」

「山登りを少し」

「海外にも行くんですか」

「と言うよりも、将来はヒマヤラヤ・トレッキングするのが夢なの」

皆で十日間ほどヒマラヤを歩く山旅のことらしい。

楽しそうに見えたが、小倉には関心はなかった。間が空いた時、趣味を聞かれたが、特になくて困った。すると彼女は、

「仕事は楽しい？」と笑みを浮かべた。

「ぼくは集団生活が苦手だね」笑いながら答えた。

彼は印刷会社の現場で体を使って働いている。

「ぼくは、そういうところから、外れてしまいがちな人間らしい」

「どんな風に」

「肌合わないのか、皆からも、冷ややかな目で見られていたみたいだね」

「月日が経ったら、違ってくるかもしれないわ」

「この間、年上の女から得体が知れないなんて、言われた」

「まあ、失礼なことを言う人がいるのね」

「普通なのに、誤解されるのは嫌だね」

「全然変な人には見えないけど」

「有り難う」

「ところで、あなたは何の仕事をしているの」

「私はプログラマーの見習い中なの」

「難しいことをしているね」

年は十九歳で、何とかして一人前になりたいと言う。それから色々なことを話した。美人ではないが、人柄がよさそうで好感がもてた。彼は外観よりも内面を重視し、母性が滲み出るような女が好きだった。男は母親には弱いものだ。それが高じてへんなことをする奴がいる。ある友人は母親のパンツを盗むというのだが、どういう気だろう。

安井恵子と出会いがあつてよかった。けっこう気が合うからだ。名刺を交換して連絡が取れるようにして別れた。時々スマホで話すようになり、それが癒しになった。

会社では菊江にそっぽを向いて無視しているが、自分の怒りが菊枝に伝わればいいと思つている。恵子とは電話だけではなく会つてコーヒーを飲んだ。桜の季節が過ぎ、温かい日や寒い日が交互に続いているような日々だった。

土曜日の午後で、会社の帰りいつものバス停で待つ

ていた。どういう訳か、菊江がこちらに向かつて歩いて来る。彼女は毎日、中央線の電車を通つていて四ツ谷駅で降りしているが、その日はバスでどこかに出かけるらしい。乗り合わせたくないものだと思つていたら、三町行きバスが近づいて来た。小倉は菊江が小走りに駆けて来るのを尻目に一足先に乗り込み、最後尾の真ん中辺りの座席に座つた。敵を撒いたつもりだが、彼女はすぐ後から、

「ここに座らせてもらつていいかしら」

遠慮深げに腰を下ろした。菊江はこの頃の小倉を気にしているに違いない。けれども何が原因で気分を損ねているのか知らないだろう。そのことは前から一言言わなければならぬと思つている。彼女はぶつすらしている小倉に話しかけて来た。

「私、M町でお買物をするの」

返事をしないで黙つていた。

「小倉さんはデートじゃないの」

「…」

「恋人、いるでしょう」

「そりゃ、ぼくも男だから」

「ほら、やっぱりいるのね」

「別に珍しくないですよ」

「若い人っていいなあ」

菊枝は小倉のことなど無關心なくせに理解ありげである。その芝居がかかった優しげな口調が煩わしかった。話しかけるのを止めくれないかと思つていると、ひよんなことから關心がそれた。

どこかの停留所から乗った乗客の中に男装がいて、小倉たちと同じ最後尾の窓際に座った。菊枝はよほど珍しいのか、もっぱら小倉の向こう側に座つていゝる女に注意を向けた。男装はショートカットを七三に分け、薄地の渋いこげ茶色の背広にネクタイを締めた上品な中年である。水商売をしている人なのだろう、崩れたところが少しもなく、どことなく氣品が漂つていゝる。最初菊枝はさり気なさそうだったが、だんだんと關心が強くなつたのか、バスの揺れのせいにして、半身を僅かに乗り出して見るようになった。小倉はいくら何でも失礼ではないかと氣を揉んだ。咳払いをしたり、睨みつけたりして止めさせようとした。男装の女を珍奇と言わぬばかりな、露骨な視線は許されない。

バスがM町の一つ手前の停留所に近づく頃、男装が支度して立ち上がると、菊江の方にユックリ体を向けた。小倉は訳もなく胸が高鳴つた。何かが起こりそうな予感をして。そしてやはり起こつた。男装は菊枝の

前に立つと、伶俐な視線を向けて、

「あなた、人の様子をジロジロ見るのは失礼ですよ。少しは慎んでくださいな」

抗議したのだつた。凜とした声が静かに響いて、乗客達の目がそこに集まつた。縁なし眼鏡をかけた色白の顔が赤く染まつた。小倉はいたたまれなくなつて下を向いた。やがて男装はそろりと立ち去つた。撫肩の華奢な後ろ姿が小倉の目に焼きついて、なんて繊細な体つきだろうと感心した。果然としていた菊枝はふと我に返つて、

「私、そんな失礼な振る舞いをしたかしら」

「あの人の言う通りです」

「それなら、私、いけないことをしたのね」

「そうですよ」

「これから氣を付けるわ」

菊枝は消え入りそうな声を發した。

バスはM町駅前不停まり、二人は降りて右と左に別れた。小倉は駅に向かいながら、胸につかえていたものを取り除かれたような氣分になつた。彼女が代弁してくれたようなものだ。後味は悪いものしこりは消えた。出勤の日に菊江に、

「お早うございます」

こっちから挨拶したらどうだろう。びっくりするかな。嫌味のつもりではない。地下鉄駅前に恵子が立っていて、手を振った。階段を下りながらさっきの一件を話して、

「これでケリがついたよ」小倉はニッコリした。

「すつきりしたでしょう」

「ぼくは得体が知れない人間なんかじゃない、个性的なんだよ」

「そうよ、その通りよ」

恵子は応援するような口調で言った。

初稿 慧1号 昭和61年6月発行